

実験講座 藍で染めよう 奮闘記

10月15日(土)、毎年開催している実験講座「藍で染めよう」、受講者15名と盛況の内に終了した。今回のコラムでは、講座開催に至るまでの準備について記すことにしたい。

日本では、遅くとも5世紀には本格的な藍染めが行われており、その方法は生葉をそのまま用いて染める「生葉染め」、乾燥させた藍葉を3ヶ月ほど発酵させた「すくも」という藍の染色液で染める方法がある。すくも作りは素人には無理なので、当館では生葉染めを選択している。手順はいたってシンプルで、収穫した葉をすぐに手で揉み込み、水を足し青汁を作る。青汁内の葉を漉せば、染色液の完成である。

この講座の担当となりまず驚いたのは、その本格さである。なぜなら、染色材料となるタデアイを育てていくところから準備は始まるのだ。染料専門店で販売している染料を購入するのだと思っていたので衝撃だった。…もし、タデアイが育たなかったら講座が成り立たないではないか…。

不安は的中し、講座の1ヶ月前に突如葉が枯れ始めてしまった。原因は不明だが、このままでは講座開催が危うくなってしまう。そこで、牛田智氏考案の電子レンジ乾燥法を試みることにした。通常、枝から摘み取り乾燥させた葉で染めることは出来ないのだが、電子レンジを用いて、短時間で葉中の水分を蒸発・乾燥させると「生葉染め」と同じように染色が可能となる。一方で、染色液の抽出に通常の生葉染めより時間を要してしまう。そこで、体験館指導員の緒方氏と話し合い、抽出を待つ時間には、藍染めについての説明やウコン染めのデモンストレーションを行うなど、受講者が退屈しないような構成とした。

最後まで悩んだのが「何を染めるか」である。材料費は受講者負担のため、法外な金額だと受講者が減るおそれがある。そこで、無印良品のA4サイズの綿エコバッグに決め、その他雑費等合わせて参加料を500円内に納めた。



受講者と藍染め作品

そうして迎えた講座当日、蓋を開けてみたら受講者の大半が染色経験者で、抽出時間の長さについても理解して頂き、逆に染色液の抽出から体験できるなんて本格的だ、と好評であった。受講者は4人一班とし、抽出から染色まで班ごとに進めていってもらった。通常の生葉染めとは異なるため、判断に迷う部分もあったが、最後に全員エコバッグが染まったのを見たときは、ほっと胸をなでおろした。また来年度も担当したい、そう思える、やりがいのある講座だった。

(谷口晴子)